
エンジェリックハーツ

希鈴レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェリックハーツ

【Nコード】

N0401Y

【作者名】

希鈴レッド

【あらすじ】

高校一年生の平塚爽真は十二月の中旬に突然、自分の彼女に振られてショックを受けた。その夜に彼は一人の少女と出会った。その出会いで爽真はこの世界の事態に巻き込まれていくことになる――。 ” 魔天使 ” という存在は人々を救う！？ ヴァニラとアナに出会った爽真はこれからいったい――？ 『それぞれの心と想い』のストーリー！。

終わりと始まりのプロローグ

人はすぐに憎しみを生み、争いを起こす。

世界は争いや戦争で荒れ、次々に憎しみが連鎖する。

憎しみはやがて悪魔を生みだす。

その悪魔は人の心を喰らい、成長していく。

だが人々はそれを気にせずそのまま争いを続ける。

こうして世界は破滅へと向かう。

地球の様子を見て、天界の神は特別な人間を地上に与えた。

特別な人間は心の力で悪魔を取り払い世界を救った。

だが、悪魔は次々に生まれてゆく。

しかし、特別な人間はそれに屈せず戦い続けた。

天界より舞い降りた魔を狩る人、“魔天使”として。

十二月。もうすぐで冬休みがやってくる時期になった。

高校一年生の平塚爽真ひらつかそうまは中学三年生の時に彼女になってくれた西にし野美弥子しのみやことデート中だった。

今日はずっと鉛色の空だった。今日は午後から雪が降ると天気予報で伝えていた。しかし一粒も全く降らない。雪がちよつとちらついているときにデートをしていたらどれだけロマンチックなのだろうと考えながら爽真は美弥子と手を繋いで、クリスマスに向けての電飾準備をしている大通りを歩く。

「晴れてたらよかったのにね。そしたら明るくてとっても楽しいデートになりそうだったのにね」

「そ、そうだね」

さっきまで思っていたことは撤回しようと、爽真は自分に言い聞かせる。

「もう四時かぁ。けっこう暗くなって来たもんね。そうだ！ バルコニーに行かない？」

「バルコニーか。街の景色が楽しめるし、いいかもね。行こうか！」

ふふつと美弥子は笑って、バルコニーの方へと歩き出す。

爽真たちの住む天馬市には小高い丘の公園があり、そこには展望用のバルコニーがあり、街を見渡せるようになっている。クリスマスに近い今の時期なら、電飾が星のように輝いて、絶景スポットと変わっていることだろう。

（美弥子とこんな風にずっと過ごせていけたらな。幸せだろうな）

と思いながら顔をニヤつかせている爽真を見て美弥子は困ったような顔をする。

「うわあ！」

バルコニーにやって来た二人は光り輝いてる街を見て感激する。

「なんか、いつもと違う感じだな」

「そうよね！ とってもきれい。ずっとずっと、いつまでも見ていたいくらい。この景色を。爽真と二人で……」

「僕も見たいよ。美弥子と」

「……」

美弥子は返事をせず、爽真の方を見てニコツと笑って見せた。爽真はそれを返すように笑って見せる。

「今日まで生きてて良かったって、そう思える」

（……………え？）

いきなりすぎて声に出せず、心の中でなにか引つかかるような感覚を受ける。

「ちょっと待っててね。過ぐに戻るから！」

美弥子はそう言って小さく手を振り、爽真を横切って、公園を後にした。

（さっきの言葉は、どういう意味だったんだ？ …… それくらいの思い出になったってことかな？）

そう思ったら爽真は嬉しくなって、ついガッツポーズをしてしまった。公園にあるベンチに寄って、そこへゆっくりと座り込む。

手袋を今日は忘れてしまって、すっかりかじかんでしまっていた。（その分美弥子の手のぬくもりを感じることができたから良かったけど）

と、また美弥子のことを考える。

もう七時近い。

いつまでたっても美弥子の姿が現れない。爽真は手をこすり合わせながらずっと美弥子を待った。

（もしかして、帰ったのかな？ それか何か事故に巻き込まれて）とてつもなく不安と焦りの感情がこみ上げてきた。緊張が高まっていく。もう座っていても仕方がないと思い、ベンチを立ちあがろうとすると、

「わあ！」

「うわっ！」

後ろからいつの間にか公園内にいた美弥子の姿があった。いきなりおどかしてきたので、爽真は思いつきりベンチの背もたれに背中をぶつける。

「相当驚いたみたいだね！」

「そ、そりゃ驚くよ」

「あははっ!」

美弥子は大笑いをする。今日一番無理して笑っているようにしか爽真は見えなかった。

「そうだっ!」

美弥子は自分のカバンの中から小さな袋を取り出す。

「プレゼント!」

「プレゼント? お、おう。ありがとう」

「開けていーよ!」

わくわくしながら爽真は袋のテープをはがし、ゴソゴソと探る。中には紺色の毛糸の手袋が入っていた。今日は手袋をしていないからと気を使って買ってきてくれたのだろう。別にないわけじゃないのだが。

「ありがとう。嬉しいよ」

ニコツと静かに微笑む美弥子。そして明るくなってきたバルコニーの方へと歩む。

街灯が消えたり付いたり点滅している。

「……別れよっか」

「……………は？」

聞き間違えたのだろうか、と爽真は思った。突然の言葉に胸がズキリと痛んだ。

「え、ちよつと……。美弥子」

「別れよっかっていったの」

爽真の方を向かずに震えるような声を出して美弥子は言った。
衝撃的だった。

今日の朝からずっとデートをしていても楽しかった。美弥子も本気で笑ってくれていた。

（今もらったプレゼントだって……）

今さっき手袋をもらったばかりなのに、なぜ別れ話が出たのか爽真には判らなかった。頭の中で整理ができない。胸がどんどんえぐられていく気持ちになる。

「今まで楽しかったよ。ずっと君を好きでいられてすごく良かった！」

「どういう……こと？」

話がかみ合わない。

美弥子は爽真の方を振り向いた。ストレートロングの黒髪がなびいている。美弥子の目からは涙な流れ落ちている。

（わけが判らない……）

爽真も涙が溢れてきそうだったが、ばれたくないので顔をうつむかせる。

悲しみと悔しさと怒りと何かが混ざり合い、爽真の心を傷つけていくようだった。

爽真の唇に温かいものが触れた。美弥子の唇。なんで別れようとやってきたのにしてきたのか理解のしようがない。

そうして美弥子は唇を離し、立ち上がった。爽真は涙が溢れすぎて、視界がぼやけてしまっている。

爽真は目がぼやけているせいでよく見えなかったが小さな粒が自分の手に落ちた気がした。雪だろうか。それにしては温かい。涙だろうか。だが濡れてはいない。

「私、旅に出なきゃいけないんだ。もう帰ってこないかも知れない。だから、さよなら」

「……」

爽真はなにも言えなかった。なぜか美弥子が別の次元の人間に感じてしまって。自分はなにも関係のない存在のように感じた。足音は聞こえない。まだそこにいてくれるのだろうか。

「美弥……子」

うつむきながらも手を伸ばす。しかし触れることができない。

（いない……？）

顔をあげると、もう彼女の姿はなかった。

「そんな……ウソだろ……」

絶望感が溢れてくる。日常となっていた刻ときが壊れていくような、そんな感じがして爽真は体中の力が抜けていくのが判る。

あの笑顔を見ることはもうないのだろうか。学校へ行けばまた見れるんじゃないのか。まだ好きでいてもらえているはずだから。と言い聞かせる。

（旅に出たなんてウソだ。ウソだ。ウソだ……）

十二月十五日。この日は爽真が美弥子と付き合い始めた日だ。そして、今日がその日。ちょうど一年たって別れてしまうとは爽真は思いもしなかった。信じたくなかった。でも、美弥子の姿はない。本当に振られてしまったのだ。それが現実。

爽真はフラフラと立ち上がり、公園の入口の方へと向かう。まだ追いつけるかも知れないとまだ心のどこかで思い続けているのだろう。

雪が降り始めた。初雪だ。とても冷たい。心にもその冷たさが伝わっていくようだった。

（……そういえば、さっきの温かいものは一体……？）

そう思いながらも一步一步足を動かす。

入口の方にだれか立ってる。まさかと思い爽真は目を輝かせた。

「美弥……」

違った。女の子だった。緑色の長い髪。くせ毛なのか、すこし髪の毛の方が横に広がっているような感じた。身長は百五十センチ前後だろうか。その少女はゆっくりと爽真へと近づく。

「な、なにかな……」

精神的にダメージが大きく、喋るのが辛かったが頑張って声にした。

少女は寒いのか顔が赤い。よく見ると肌が白い。とてもきれいでかわいい子だ。

「えっと……あの」

「？」

年上だから恥ずかしいのだろう、もじもじしていて言葉が出ないようだ。

「いいよ。落ち着いて喋って」

爽真は無理してでも笑って見せる。

「あ、はい……すみません」

ペコリと頭を下げた後、少女は爽真の顔を見て、

「あなたも”魔天使”ですよ？ お力を借りたいのですが……」

「て、天使………？」

突然の子供らしい（？）発言をされて、爽真はとまどってしまった。

さっきまでの出来事が無かったことかのように爽真はつい思えて

しまった。

——だがこの時、爽真は気がついていなかった。この少女との出会いでさっき失った『日常』がさらに失って、大変な事態へ巻き込まれていくことも知らずに。

ヴァニラとアンナ

「おにーちゃん、もう朝だよ」

爽真は妹の結奈の声で目が覚めた。

（あれ……もう朝か……）

寒いのを我慢して布団から抜け出して、背伸びをしながらあくびをした。

「早き着替えてよね。二人とも、もう準備できて朝ごはん食べ始めてるわよ」

「そうか……じゃあもう行くから覗くなよ」

「覗きなんかしないわよ。自分のお兄ちゃんなのに」

結奈はふくれっ面になって部屋のドアを閉める。

爽真はすぐに制服に着替えると、朝ごはんのあるリビングへと向かう。テレビのニュース番組の音が聞こえてくる。

そして、入る直前に疑問を抱いた爽真。

（二人がもう朝ごはん？）

爽真と結奈の両親は小さい頃にどこかへ行ってしまった、帰っていない。なので二人で頑張ってこの家を守っている。お金など食料は近所の仲のいい人たちからいつも申し訳ないほどにもらっている。もうお亡くなりになってるんじゃないかと思っていた二人が急に

帰って来たとしか思えない、と爽真はとっさに考えてリビングへ滑り込む。

そこには、

「おはようございます」

「……」

二人の女の子がいる。一人はどっかで見たことがあるがもう一人は知らない。

（たしか……！）

そう。一人の髪の長い少女は昨日公園で見た少女だ。

「なんで君がここに……！ それと、もう一人は誰だ！」

「朝からごちゃごちゃうるさいわね」

「そうよ、お兄ちゃん。早く食べて出かけなきゃいけないんでしょ？」

「え？ え？」

全く追いついていない。記憶喪失かそれとも夢かと悩み、爽真は自分の頬をつねってみた。痛い。夢ではないようだ。

「いつたい……」

まだ寝ぼけてるんだと、さっき夢ではないと証明させたが否定し

つづける爽真はとりあえず朝ごはんを食すことにした。

ご飯に味噌汁にベーコンエッグなど、朝らしいメニューだ。いつも中学二年生である結奈が早起きして作ってくれている。ちなみに高校へ行く時の昼ご飯も妹の作った弁当だ。

妹は家事全般できるものすごいやつだと爽真はいつも感心している。ただ自分でやるのがめんどくさくて妹にまかせっきりというものもあるのだが。

それにしても、食べづらく感じる爽真であった。

「えっと……二人の名前は？」

「は？」

茶色のショートカットヘアの女はベーコンエッグを口に運ぼうとしているときに反応した。

「記憶にないの？」

「僕って記憶喪失したのか？」

「知らないわよ」

「アンナ」

「どうしたの、ヴァニラ？」

どうやら男勝りの口調をしている女はアンナという名前で、昨日会った少女はヴァニラというらしい。

「この人は、”魔天使”なのです」

「んー……そーみたいね」

アンナは睨みつけてくる。

「まてんしって何？」

爽真は怪訝そうに訊いてみたが反応がない。

「知らないのに”魔天使”って……あんたはなんなの？」

「僕は平塚爽真で、普通の高校生で」

「本気で知らないようね」

言いきられて、爽真はがっかりした。昨日からなんにも話についていけない感じた。美弥子の事も。

「ごちそうさまです」

ヴァニラは軽く頭を結奈に向かって下げた。

「お粗末さまでした。ホントヴァニラちゃんかわいい！喋り方もほんわかしてて」

「い、いえ。その」

赤面になってしまったヴァニラ。

「とりあえず説明とかしてあげるから、出かけましょ」

アンナは食器を片づけて、もう出かける準備をしているようだ。

「え、あ、おう」

唐突過ぎてもう何が何だか、と困惑な想いを抱きながら、爽真も準備を始める。

日曜日の天気は晴れだと天気予報で言っていた。だから今日は雪が降ったりはしないのだろう。

三人で散歩しながら、爽真は何を聞こうか悩んでいる。色々あり過ぎて困る。

「あたしはアンナ・カスターノ。こっちはヴァニラ・エリセ。あたしたちはヴァニラの執事のモロクさんに頼まれて、この日本へ来たの」

突然の自己紹介。

「頼まれて？」

執事って事は、ヴァニラはお嬢様なんだなと思いながら爽真は訊いた。

「ええ。ヴァニラを守るためにスペインから離れて日本へ向かってほしってね」

「ヴァニラは誰かに狙われているのか？」

アンナは静かにうなづいた。

「ヴァニラには”伝達者”という特殊な力があるの。”伝達者”は”魔天使”の素質があるものに力を解放させる力があるのよ。それを恐れて、人の憎しみから生まれた悪魔——”霊魔”たちが”伝達者”を襲うの」

（ヴァニラは伝達者？ 魔天使の素質……解放？）

うーん、と唸りながら腕を組んで首をかしげる爽真。

「あんたも”魔天使”の力があるのになんでそんなに悩むのよ」

呆れるような目で爽真を見るアンナ。

「まあいいわ。魔天使ってのは、人の憎しみから生まれた霊魔を退治するための能力を持った人の事よ」

へえ、と爽真は少しだけ理解した——ような気がした。

「霊魔は、人の心が弱くなつてるときに人間を襲い、その人の心を喰らう。そうして霊魔は成長していく。喰われてしまった人は自害したり、もう絶望しか持てなくなり、希望を持つことは無くなるのよ」

「なんだって！」

そんな事があるのかと驚愕する爽真。爽真は昨日は絶望しか持っていなかった。だから心が弱くなっていただろ。あのときもし霊

魔がいたら心は喰われて自害してしまったらと、少し恐怖心を抱いた。もしかしたら今も心が弱っていて、狙われるかもしれない。

「だから、人々の心が喰われないように戦うのが”魔天使”。魔を狩るための天使よ。魔天使に選ばれる人は心が強い証拠。強い人は夢のなかで天界の神が力を与えてくれる。もしくは伝達者であるものと遭遇した場合、そこで解放してもらえる。その日からもうずっと、霊魔たちと戦って行かないといけないのよ」

「じゃあ僕は心が強いってことか」

一人で納得しているのを見て、アンナはため息をつく。
河川敷を歩きながら、ヴァニラはキラキラ光っている川を見ながらアンナの横とちょこちょこ歩く。

「あんたはもう解放されてるのよ。戦ったことないの？」

アンナに指を差される。

「ないよ」

爽真は驚いたのを隠すように即答する。

「もしかして、心器ハーツさえも知らないの？」

「なんだよ、それ」

一瞬沈黙な時間ができた。その後にアンナは大笑いをした。腹を抱えながら。そして笑い終わるとすぐに前を向き歩き出す。
なんかバカにされてるのかと思いつながら爽真は後に続く。

「それなら、説明よりも実践の方がいいかもね」

「え？」

「霊魔が来るわ。あんたはヴァニラと一緒に下がってなさい！」

いきなりの展開に爽真はまたおいてけぼりにされた。

突然地面が揺れる。地震だ。川の方に大きな影がゆらゆらと映り始めたのが分かった。爽真はそれに気づいて、ヴァニラの手を引いて、堤防の方へと行く。

「さあ、戦闘開始ね」

川の水面が山のように盛り上がって、水しぶきが散る。川の中から、大きなムカデのようなものが現れた。顔は骸骨のようで、目のところには青白く光る目がある。前足近くのは腕が伸びていて、カマキリのような鎌があった。とてつもなく気持ち悪い。

アンナは片手をあげて、指をパチンと鳴らした。突然アンナの周りがからくろい球体が現れて、ムカデのようなでかい虫も爽真やヴァニラものみ込まれた。

朝なのに、一気に夜の世界になったようだ。空が真っ暗。それどころか周りの景色が白黒になっている。さらに、数人は人がいたはずなのに消えている。

「どういうことだ？　なんか違う世界にいるみたいだ……」

爽真は啞然として、白黒となった景色を見渡す。

「ここは”晶界”^{しゅうかい}。爽真さんの世界から隔離された世界。魔天使が

「霊魔を狩るための世界です」

「そんな世界があつたのか」

爽真は驚きを隠せない。

「ぐぎゃあああつ！」

虫の姿の霊魔は鎌を振りおろし、アンナを狙う。

「危ない！」

爽真は思い切り叫んだが遅かった。アンナがいたところに鎌が降りおろされて、地面にささる。土煙が舞う。

（そんな……）

霊魔はとてもおそろしいと今とてつもなく感じた。次は自分たちもやられると爽真は思わざるを得なかった。

「勝手にやられたとか思わないで。あたしはここよ」

アンナに声がした。なんと、街灯の上にいつの間にか立っている。そして、両手を胸の前で構えて光を収束させる。

「これが心器^{ハーツ}よ！　これがあたしの、”妖弓フェアリーボウ”！」

光は弓の形となって姿を現した。ピンクの弓。

（すいっ……）

こんなのは漫画や小説の世界にしかないと思っていたことが、爽真の目の前で起こった。

「ぐぎゃあ！」

霊魔は鎌を横殴りに振るった。しかし、アンナの方が速い。上に飛び上がり、弓を構えた。足が空の方へと向いて、頭は地面の方。空中逆立ちのような感じで、弓は右手に持っているフェアリーボウに左手を近づけて、矢を射る前のように手を引く。すると、左手からピンクの光が出現し、矢の形を形成していくではないか。

「あれが、心器^{ハーツ}……」

かつこいいいと思いながら、彼女が矢を射て、霊魔の顔から一気に貫通させ、体部分まで到達し、打ち抜いたところをみた。まさに矢を射るが如しだなと、爽真は霊魔が光の粒子となって消え去っていくところを目にして思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401y/>

エンジェリックハーツ

2011年10月30日15時12分発行